ヲ承出候テ、六郎五郎ガ父ニ申候ハ、其方兄ノ敵ノコト日比心掛候ガ、トクト其有家ヲ承出候間、此上ハ申合候テ討申ベク候間、心易ク存候ヘト申候ヘバ、六郎五郎父申候ハ、其方左ヤウノ心底ト不存候テ、念比ニ致シ候我ラ兄ノ敵ヲ其方ヲ頼テ討申ベキ所存ニテ、其方ト兄弟分ニ成候ト存候ヤ、左ヤウノ比興ノ心底有之者ト不存候テ、申通候コト後悔ニ存候、最早向坂義絶イタシ候トテ、交リヲ絶申候、其後右敵無程病死イタシ候、六郎五郎ガ父無念ノ餘リ、是ヲ苦ニ致シ、終ニ氣鬱ニテ相果申候、其時六郎五郎ハ當歳ニテ、中々育申マジキト思ヒ候、アノヤウニナリ候ヤト、御落涙ナサレ候、其後仰ラレ候ハ、若者ドモヨク心得候ヘ、君父ノ敵兄ノ仇ナド申者ヲ討申ニハ、武邊名聞ハ曾テ無之事ニ候、女ヲ頼ミ申テモ討申ガ肝要ニテ候、六郎五郎ガ父モ、自身討申ベキト存候テ時節後レ、終ニ討損申候、是ハ若氣ニテ惡キ心得ニ候、君父兄ノ敵ヲ一刀ウチ申テモ、手柄ト申義ニ候、又人ヲ頼テ後レト申スニテモ無之候、只早ク討申ガ肝要ニ候、爰ヲヨク合點仕候ヘト御意ナサレ候、

〔窓の須佐美三〕元祿のころにや、武藏の三田と云ふ所、渡邊綱が在所にて、忍領の境なり、忍の術者目付役、荒卷十左衞門と云士、馬上にて通りしに、年二十六七計り一人、三十ばかり奴僕一人つれて來り、馬上に向ひ親の敵なり、討果申べし、馬より下られよと云懸しかば、荒卷編笠を著したるが、其儘下り立所を、奴僕拔打に足を切ければ倒れしを、彼士一刀に切殺しぬ、扨笠をとりて見れば、人違ひなりしほどに、初遁散し若黨鑓持など呼て、家苗を聞て、いよ〳〵見損じたる成りければ、近所の寺へ立入、忍の家士に通達し、ふと見損じて奴僕の切たるゆへ、已事を得ず討留し、卒爾の至り此上遁べき樣無之候、敵は越後に居候と承りて尋行とて、如此の通り候、此儀をば讐を討候まで命を御貸候て、本望屆け樣に被成候へかしと云しかば、撿使の士聞屆け、僕を免し遣し、その士は自殺させけり、斯て奴僕は翌年越後にて讐を討逃、〇下略